

# 赤松居館跡 発掘五年間の成果

島田 拓

はじめに

赤松居館跡は、兵庫県赤穂郡上郡町赤松字御屋敷に所在する。古くから中世の守護・赤松氏の居館跡として知られており、宝暦十二（一七六二）年に平野通庸によって記された『播磨鑑』には「赤松村二円心ノ屋敷跡一段高キ所」と記され<sup>(1)</sup>、天明年間に描かれた赤松村絵図には「円心屋敷」と記される蒲鉾形の区画が表現されている<sup>(2)</sup>。

このように近世までは赤松円心の屋敷跡と認識されていた区画は、明治になると学校用地として利用され、昭和四十一（一九六六）年に旧赤松村の三つの小学校を統合して、苔縄の地に新たに赤松小学校が開校<sup>(3)</sup>すると、この区画は転売され現在に至っている。

上郡町教育委員会では、この赤松居館跡の実態

を解明するため、兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室（以降、歴史研究室と略記）と共同で、平成二十八（二〇一六）年から三ヶ年計画で文献史学と考古学の分野から調査を行い、令和元（二〇一九）年から二ヶ年で整理作業・報告を行った。本稿では、赤松居館跡発掘調査の五年にわたる成果について述べ、今後の展望を示したい。

## 一、赤松居館跡の発掘調査成果

赤松居館跡の発掘調査成果については、報告書や既稿で報告を行っているため<sup>(4)</sup>、概略に留めるが、調査前に行った地形測量の結果、居館跡は凸字状の平面形状を呈しており、一見すると平坦地に見えるが、北東側から南西側へ緩やかに傾斜していることが明らかとなった。

また、北側に張り出した部分については、その



図1 赤松居館跡調査区配置図 (S=1:1,000)

すぐ両側の平坦地が極端に狭く、不自然な地形となつてゐる。仮主軸を設定し、居館跡北側に設定した一トレンチでは、調査区の北半部には中世段階に遡る遺構は認められず、近代以降の遺物しか出土してゐない。したがつて、凸字形の北側に張り出した部分については、後世の削り込みによるものであると考えられ、元来は村絵図に示されたように蒲鉾形の平面を呈していたと考えられる。

発掘調査の中で、大きな成果としては、少なくとも三時期の遺構面が確認されたことである。

最も浅い第一遺構面は、大規模に整地を行つて居館を形成したと考えられる。現況地表下約二十〜三十センチメートルで遺構面を検出し、居館跡西半部で礎石柱列や礎板を持つ柱穴、廃棄土坑や溝を検出した。

礎石柱列は三列検出し、いずれも礎石に二十五〜三十センチメートル前後の川原石を用いて、東西方向に伸びている。SB五三は一・八メートル間隔で六間分を検出。SB七五は礎石と抜穴を交互に一・八メートル間隔で五間分を検出し、SB七四は二・七メートル間隔で三間分を検出した。

しかし、いずれも対応する柱列を検出できず、どのような建物であつたか判然としない。

また、廃棄土坑や溝からは大量に土師器皿が出土した。遺構ごとに出土する土師器皿の傾向に若干の差はあるものの、概ね同一時期と考えられる。

なお、調査区東半部では顕著な遺構は検出できなかった。東半部に東西に設定した五トレンチでは、地山層を検出しており、上面の遺構は削平されてゐる可能性が高い。

第二遺構面は、第一遺構面の約二十〜四十センチメートル下層に黄褐色粗粒砂混シルトを基本とする層があり、これをベース面としている。

居館跡西半部に設定した九トレンチでは、ベース面が調査区中央部から南西側へ向けて大きく落ち込んでいく様子が確認された。また東西に設定した七トレンチでも、第二遺構面が南西側へ向かつて傾斜する様子を確認しており、第二遺構面は居館跡南西部が大きく傾斜する地形であつたと判明した。したがつて、第一遺構面の整地は、この地形を嵩上げしており、調査区内では最大一・六メートルの整地を行つてゐることが判明した。

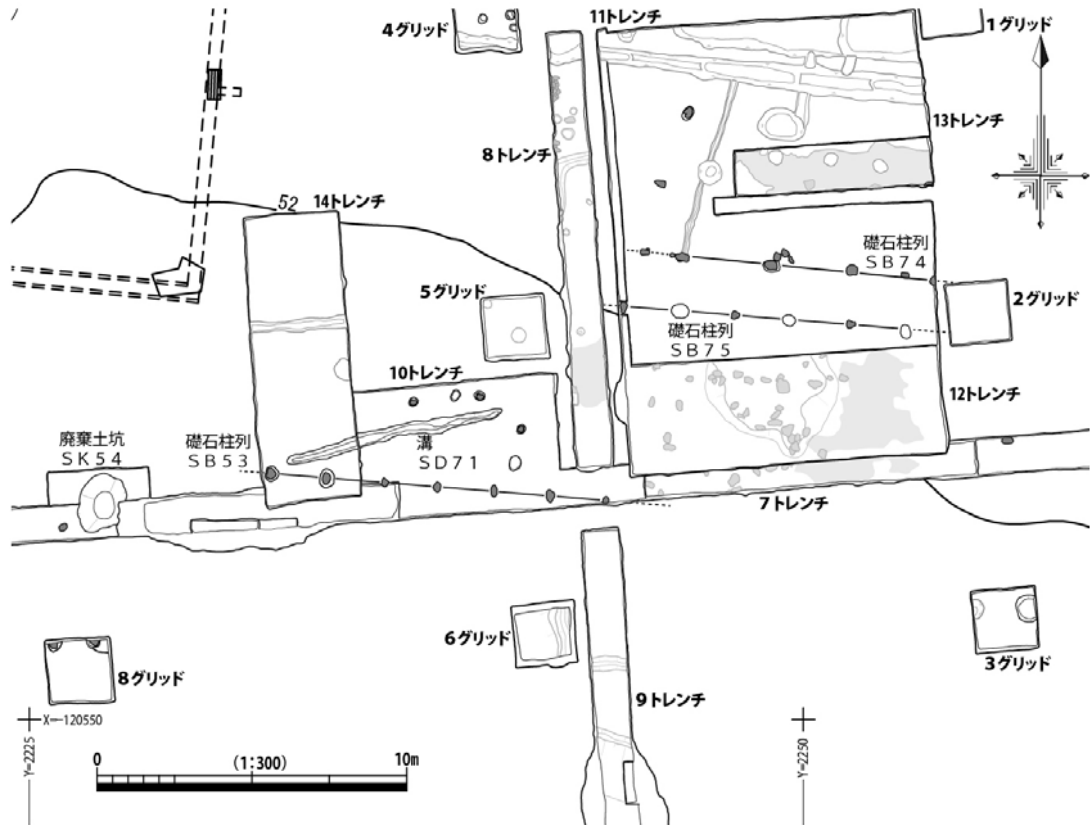


図2 赤松居館跡第1遺構面平面図 (S=1:300)

また、八トレンチでは土器溜SU六五を検出し、七・十一〜十三トレンチでは土器溜SU七六を検出した。特にSU七六は東西六・五メートル以上、南北十一メートル以上になる大規模な土器溜である。この土器溜はわずかに備前焼播鉢や甕の出土があったが、客体的であり、ほとんどが土師器皿であった。

土師器皿は、土圧で押しつぶされたように出土しており、破片が飛び散るように投げ捨てて遺棄された状態ではない。中には複数枚を重ねた状態で置いたものと考えられるものもあるが、規則性は認められなかった。

この土器溜については、水成堆積は認められず、池の岸に当たる部分も検出されなかったため、苑池ではないと考えられる。ただし、遺物が出土しない部分は、明確に盛土がされており、人頭大から一抱え大の礫を不規則に配しているため、何らかの施設が存在した可能性がある。

第三遺構面は、九トレンチ南半部で部分的に検出した。現況の地表面からは、約二メートル下層となる。



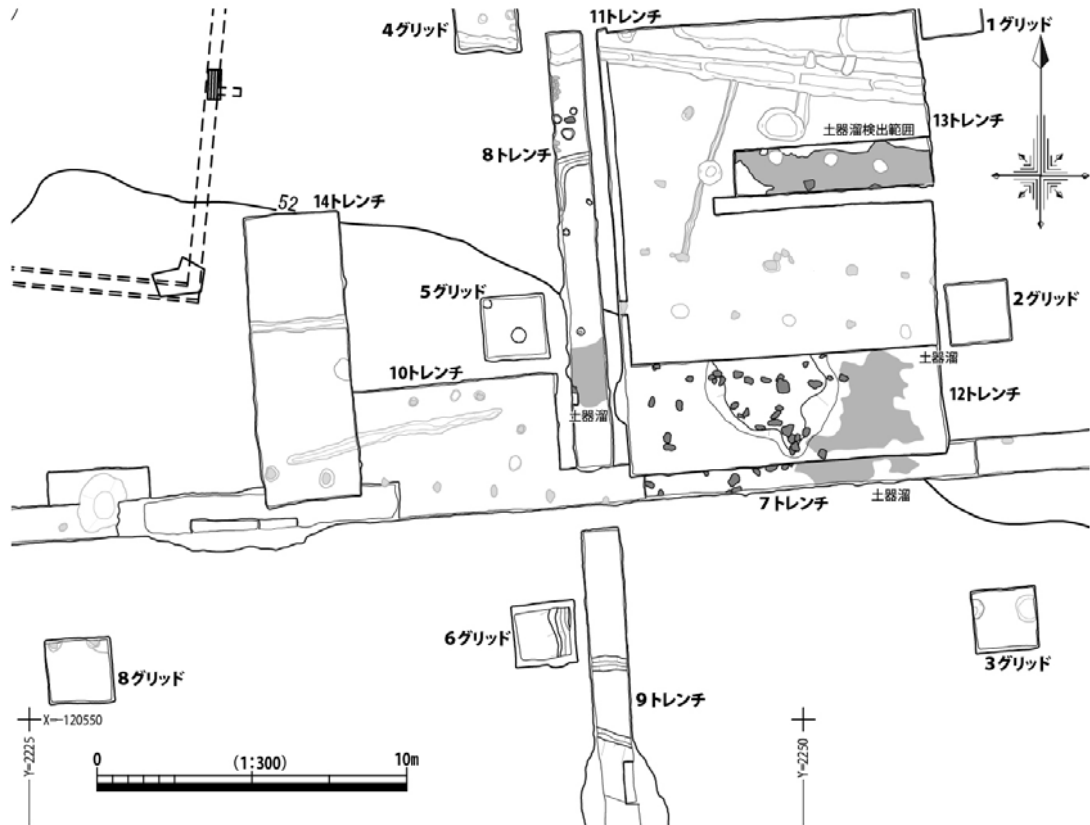


図3 赤松居館跡第2遺構面平面図 (S=1:300)

第二遺構面が南西へ向けて傾斜し、緩やかに傾斜を変える傾斜変換部で、第二遺構面から連続する黄褐色土層は次第に薄くなり消滅する。その下層に、炭化物や焼土が広がる面を確認しており、第三遺構面と認識した。

第三遺構面は北側へ緩やかに上り、第二遺構面の下層に潜り込んでいく。断ち割り土層断面でも確認しており、第二遺構面とほぼ同じ場所でも黄褐色粗粒砂混シルトの遺構面が現れる。しかし、遺構を検出できておらず、出土遺物についても細片で僅少であるため、第二遺構面より古段階と考えしておく。

二、出土遺物とその年代について

発掘調査では、第一遺構面と第二遺構面で夥しい数の土師器皿が出土した。詳細な分類は図4に委ねるが、大別すると色調によって二類、それぞれに成形技法の別でロクク口成形と非ロクク口成形があり、さらにそれぞれに口径によって六、五、八、五センチメートル前後の小皿と十、五、十二、五

センチメートル前後の中皿、十三センチメートル以上の大皿に分別し、製作手法によって二十五類に分類した。

それぞれの分類中で比較すると、第一遺構面と第二遺構面の土師器皿は非常に似通っており、ほとんど差がなく、時期ごとに分けるのは困難である。

おそらくは、赤松居館跡の第二遺構面から第一遺構面の形成にあたって、遺構の面では大規模な変化がありながらも、土師器の製作手法に隔絶を生むほどの期間ではなかったため、その変化を看取することが困難なのであろうと考えられる。

しかしながら、異なる層位であるため、その年代の特定は赤松居館跡にとって非常に大きな意味を持つ。

そこで、各遺構から土師器皿とともに出土した炭化物のうち、比較的残りが良いものをピックアップして、加速器を用いた放射性炭素年代測定を行う

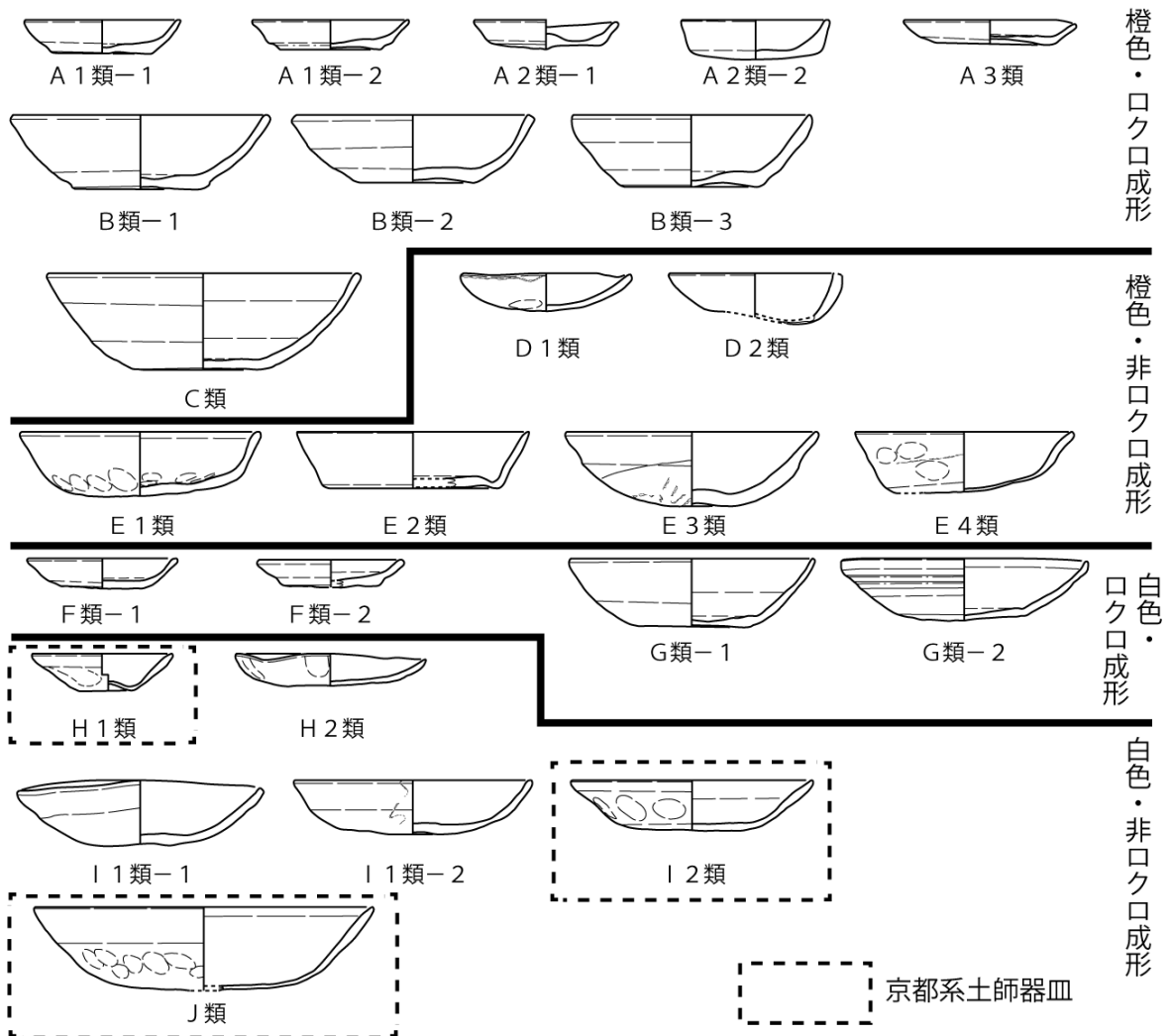


図4 赤松居館跡出土土師器皿分類図 (S = 1 : 5)

た<sup>(5)</sup> (図5)。

まず、第二遺構面から検討すると、十三トレンチ土器溜SU七六は、二つの年代が析出されており、他の分析結果との比較から、一三九八—一四二一の年代は捨象される。これを真とすると、層位と年代に交差が生じるため、あり得ない数値となる。したがって、第二遺構面土器溜SU七六は一三三三—一三三七の年代観となる。

次に第一遺構面—トレンチSD一七であるが、同様の理由で一二九三—一三二〇の年代は捨象され、一三六〇—一三八七の年代観となる。

十トレンチ溝SD七は、一二七一—一二八九の年代しか析出されていないが、この年代は第二遺構面との年代に交差が生じるため採用できない。しかし、参考値には一二六〇—一二九九の年代と一三七—一三七九の年代があり、先述の理由から一三七—一三七九の年代観となる。

最後に廃棄土坑SK五四であるが、一三〇〇—一三二四、一三四五—一三六九、一三八—一三九三の値が析出されている。一三〇〇—一三二四は、層位と年代に交差が起こるため捨象され、一

三四五—一三六九、一三八—一三九三のいずれかとなる。報告では明確に層位が異なり、年代の隔たりを考慮して一三八—一三九三と考えた。しかしながら、一三四五—一三六九の年代を積極的に否定できる根拠はなく、資料の増加を待つて再検討する余地がある。いずれにしても十四世紀後半を中心とした年代観であることは間違いないと思われる。

さて、年代測定の結果からそれぞれの層位と年代観を整理すると、第一遺構面は十四世紀後半から末、第二遺構面は十四世紀前半から中ごろとなる。

ただし、第二遺構面土器溜からは備前焼播鉢も共伴して出土しており、重根分類ではA 1類に分類され、十四世紀中ごろから後半と編年されている。<sup>(6)</sup> 当該編年はあくまで相対編年であるため、土師器皿と合わせて将来的に年代については再検討する必要がある。

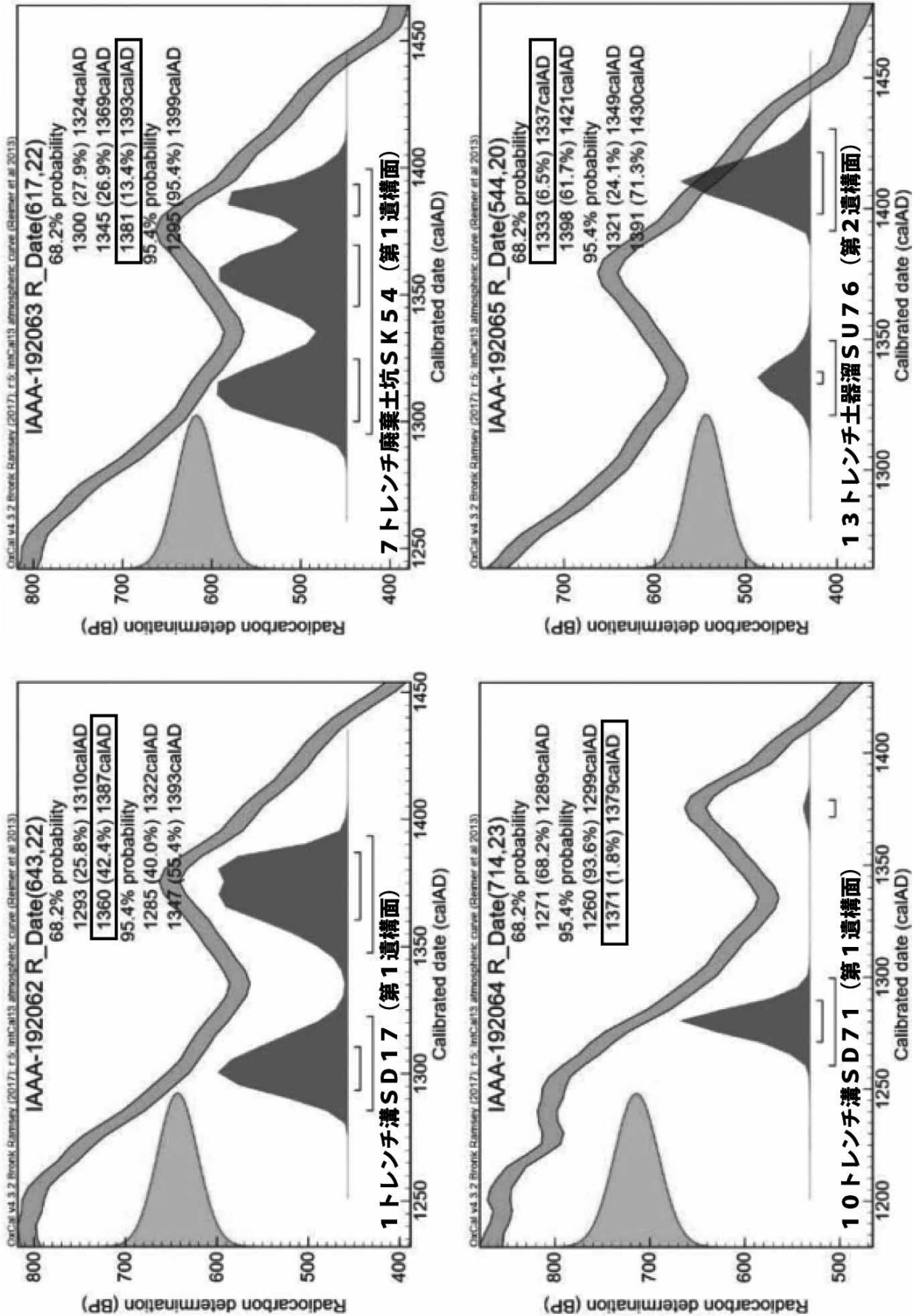


図5 赤松居館跡主要遺構の年代分析結果



### 三、京都系土師器皿と赤松氏

出土遺物についても一つ注目すべきところは、第一遺構面と第二遺構面とでは京都系土師器皿の出土割合が極端に異なることである（表1）。第一遺構面では溝SD一七と廃棄土坑SK五四、溝SD七一から合計二百五十八点の土師器皿が出土しているが、そのうち八十三点が京都系土師器皿であり、実に三十二パーセントが京都系土師器皿なのである。

一方、第二遺構面では各土器溜出土の土師器皿の合計は五百六点であるが、そのうち京都系土師器皿はわずか十五点であり、割合として三パーセントしか出土がみられない。上面の状況を考えると、異様なまでに少ないのである。

この差が何に起因しているかは、今後類例などの資料の増加を待つて改めて検討する必要があるが、先述の年代観と歴史的事象を重ね合わせて一つの可能性を提示しておきたい。

第一遺構面の遺構は、炭化物の年代分析に寄り

掛ると一四世紀後半から末の年代観となり、赤松家当主でいえば赤松則祐から義則の時期となる。

また、第二遺構面の土器溜は、分析結果から一四世紀前半から中ごろと推定され、赤松円心の時期と重なる。

つまり、円心期には京都系土師器皿が少なく、則祐・義則期には増加することになる。

円心が歴史の舞台に登場するのは、元弘三（一三三三）年であり、五十六歳のときであるが、それ以前の円心の動向は不明である。しかし、近年の研究では、赤松氏は六波羅探題配下の関東御家人であるとする説が有力と考えられており、円心も播磨国佐用荘赤松を本貫地とした代官であった可能性が高い。

とはいえ、当時は六波羅探題北方の常葉氏が播磨国守護を兼ねており、守護代である小串氏に仕える代官という立場であれば、円心が頻繁に京都への往来があつたとは考えにくい。

一方で、則祐や義則は、播磨国守護として在京し、事あるごとに播磨への帰還があつたと思われる。都度、赤松居館跡は整備されており、下国の



際に京都の文物や情報などが赤松へ流入するといった背景があったのではなからうか。

むすび

平成二十八年から始まった赤松居館跡の調査成果について、考古学と文献史学の成果を交えながら述べてきた。

未だ残された課題は多いものの、収穫も多かったと思われる。

発掘調査によって、赤松居館跡は異なる三時期の遺構面の存在が確実となり、そのうち第一遺構面は赤松則祐・義則期、第二遺構面は赤松円心期に形成されたものであることが確実となった。

文献には館を整備した人物に円心の名はなく、則祐が赤松館を初めて造営したと思われるが、発掘調査によって円心、もしくはそれ以前にまで遡る可能性が高くなったのである。

近世後期の村絵図に描かれ、伝承されてきた「円心屋敷」は確かに存在したのである。

また、文献に登場した則祐の整備記録は、第二

遺構面を大規模に整地して第一遺構面を形成した記録である可能性も高くなった。つまり、現状に見える赤松居館跡を造営した人物は、赤松則祐であると言えるのである。

今まで歴史上の人物と考えていた人物が、身近な場所で息づいていたことを赤松居館跡は如実に物語っているのである。

さらに出土遺物からは、赤松氏の動態について小考を提示した。研究の進展には資料の増加が待たれるが、これほどダイナミックな資料の変化が起こる背景には、歴史的事象があると考えるのが妥当ではなからうか。

一方で残された課題は山積している。

発掘調査では、居館の「御殿」を明らかにできなかつた。御殿に限らず居館内の建物については明確にすることができていない。

加えて土器溜は検出したが、庭園のどの部分なのか、規模や構造についても明らかにすることはできなかつた。

また、視点を広げれば、居館跡と城跡、寺院、神社、周辺集落との関係なども今後の調査に委ね

られる課題である。すでに発掘されている資料の整理を進め、赤松氏の実像に迫ることができればと思う。

そして、改めて考えると、この五年の調査で最も大きな成果は、赤松居館跡を守り、語り伝えてきた地元・赤松の方々に誇りと笑顔を届けることができたことであると思う。その笑顔を増やしていくことを心に誓い擱筆したい。

- (1) 平野通庸『地志播磨鑑(復刻版)』(播磨史籍刊行会、一九八三年。初出は一七六二年)。
- (2) 八木哲浩「赤松村絵図」(『上郡町史』第四巻史料編、上郡町史編纂専門委員会、二〇〇一年)、甦る上郡実行委員会『村絵図の世界』(二〇一五年)。
- (3) 赤松小学校・幼稚園閉校記念誌編集委員会『閉校記念誌 あかまつ』(二〇一二年)。
- (4) 上郡町教育委員会『赤松居館跡一範囲確認調査報告書』(二〇一二年)、拙稿「上郡町域の赤松氏関連遺跡の調査成果」(『ひょうご歴史研究室紀要』二、二〇一七年)、「赤松居館跡の発掘調査成果について(略報)」(『ひょうご歴史研究室紀要』四、二〇一九年)。
- (5) 基本的には、表中の六十八・二パーセントの値で

評価し、九十五・四パーセントの値は参考値とされる。また、各値の括弧内の割合は、その年代と分析された炭素量を示しており、年代の確実性を示す割合ではない。

- (6) 重根弘和「中世備前焼に関する考察」(『山口大学考古学論集』近藤喬一先生退官記念論文集、二〇〇三年)。
- (7) 没年からの推定年齢。
- (8) 伊藤邦彦「鎌倉時代の小串氏について」(『日本歴史』六二五、日本歴史学会、二〇〇〇年)、依藤保「赤松円心私論 悪党的商人像見直しのためのノート」(『歴史と神戸』一二四、神戸史学会、二〇〇一年)、市沢哲「鎌倉幕府滅亡から南北朝内乱期における赤松氏 その行動の特色について」(『赤松円心 則祐』兵庫県立歴史博物館、二〇一二年)。
- (9) 大村拓生「南北朝赤松一族の動向と赤松地区」(『ひょうご歴史研究室紀要』五、二〇二〇年)。